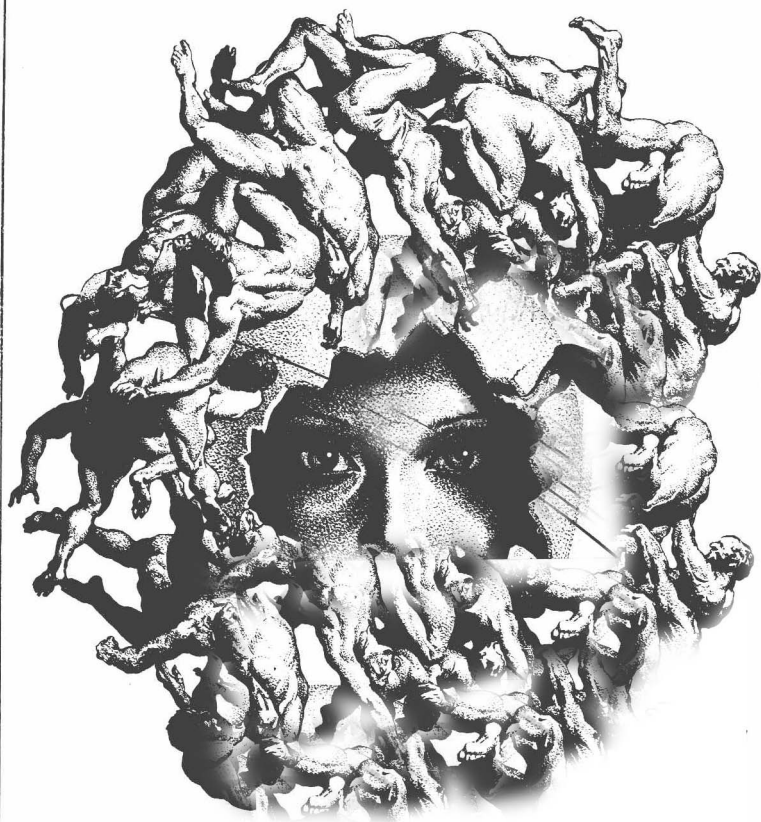




スの結び目

小松左京



角川書店

ゴルディアスの結び目

小松 左京

昭和五十二年六月三十日 初版発行
昭和五十二年七月二十五日 再版発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三
電話(東京)二六五―七一一(大代表)
郵便番号 一〇三 振替東京 三一九三〇八

印刷所 多田印刷株式会社

製本所 株式会社 鈴木製本所

Printed in Japan

0093-872185-0946(0)

目次

岬にて

三

ゴルディアスの結び目

六

すべるむ・さびえんすの冒険

三三

——SPERM SAPIENS DUNAMAIの航海とその死——

あなろぐ・らう

一九

——または、『こすもごにあⅡ』——

あとがき

二四

裝幀
生賴
範義

岬
にて

1

岬の鼻にスケッチに行つて帰つてくると、湾内に巡航船が碇泊しているのが見えた。——たった今、錨をおろしたと見え、小さなモーターランチが、鏡のような水面に、ゆるやかな水脈をひきながら、船腹をはなれてくる。

家の背後の斜面の中腹で、ちよつとたちどまつて、その光景をながめながら、私は吸いさしのパイプに火をつけた。風がやや南に寄つていたため、何本かマツチを無駄にした。やつと吸いつけて、煙を二、三服吐き出すと、私は斜面に咲く小さなたんぽぽの花をふみながら、家の裏手へむかつておりて行つた。

キッチンには、いつものとおり、テッド・チャンとクワン師がいて、お茶を飲んでいた。——クワン師は窓際にもたれ、鳥の脚のように瘠せた腕に、私の大型の双眼鏡をささえて、湾内を近づいてくるランチをのぞいていた。

——シャドウ群島^{アイランド}。×経六〇度二五分、×緯四九度四〇分。主島シャドウ島^{ランド}はか、大小八十余の島々からなる。ほとんどが無人島。人口千三百、少数の家畜、漁業のほか、これといった産業なし。首都、プエルト・オブ・スクロ（住民千百）。

「客があるようじゃ……」と、クワン師はかすれた声で言った。

「おおぜいですか？」

私は泥だらけのブーツをぬいで、スリッパにはきかえながらきいた。

「いや、三、四人——かな。一人、前にも来たような顔も見える」

「ジェリイは乗ってますかかな？」とテッドはきいた。「たのんでおいたものを買って来てくれたかな……」

コートをハンガーにかけると、私は年代ものの湯沸器サモワールからティ・ポットに湯をそそいだ。——オランダ焼きのカップに、ジャムと乾かした蘭の花を入れ、茶をつぎいれてかきまわしていると、妻がオーブンから熱いクッキーを出して来た。

「客があるという連絡はあったのかね？」

と、私は茶をふうふう吹きながらきいた。

「ええ——あなたの留守に……」

「またあの男が来ると思う」

「双眼鏡でごらんになったの？」

「いや——かんだ……」

窓に眼をやると、ランチはもう湾の半ばまで来ていた。

舢ふねは二百メートルほどはなれた隣の船着場にむいている。

私が吸いつくしたパイプから灰を掻き出していると、テッドがブレザーのポケットから、汚れた紙包みを二つ出して、テーブルの上においた。——私はだまって部屋の隅にある水煙管みずぎせるをとって、テッ

ドの前においた。

「どっちにする？」と、テッドは紙包みを顎でさした。

「どちらでもいい……」私はパイプのタールを削りながらつぶやいた。

「和尚は？」

「大麻にしようかの……」クワン師は前歯のぬけた口でクッキーをしゃぶりながらこたえた。「昼間じゃからな」

テッドは湯沸器サモワールの底の蓋ふたをずらし、火ばさみで小さな炭火を二つ三つとり出すと、水煙管の火皿においた。

紙包みの一方をひらくと、茶色がかった暗緑色の、べとべとした葉の塊りがある。

それをつまみほどつまんで、火皿の上にかぶせた、うちぬきの金属片にのせると、水音をたてて吸口を吸いはじめた。

じいじいとかすかに脂ヤシのこぼる音がして、青くさいようないがらっぽい臭気があたりにたちこめる。――二、三服深く吸って、息をとめるように瞑目めいもくすると、テッドは吸口をクワン師にまわした。

裏口のドアが、大きな音をたててたたかれた。窓の外を見ると、ランチはまだ船着場につこうとしていてところだった。返事をする暇もなく、ドアがあいてルネ神父が大きな体をかめるようにしてはいって来た。――これでいつものお茶のメンバーは全部そろったわけだ。

神父はテーブルの上に、汚れたハンカチの包みをほうり出すと、椅子をぎしぎし言わせながら腰をおろした。

「相かわらずハシッシュか……」神父は、ゆるやかに煙を吐き出しているクワン師を見ながら野球の

グローヴのような手で顔をこすった。「たまにはこれでもやってみたらどうだね？」

私はハンカチの包みをあけて見た。苔のかけらや泥にまみれた、ゴルフボールほどの茶色のぶよぶよした塊りが五つ六つあった。

「北の崖の中腹で見つけた……」と神父は言った。「ワライタケの変種だと思うがね。——だいぶ前に一度同じものをやったことがある。その時は死にかけたが、すごい体験だったよ。天国と地獄を一緒に見たような……、なに、塩と重曹でボイルして、毒性を弱めれば大丈夫さ……」

「何か新しい成分でもありそうかね？」

私はかさかさしたきのこを指先でつつきながらきいた。——灰色の胞子がかさからこぼれた。

「知らんな。——ムスカリン、ムスカリジン、コリン……それに何だかわけのわからんアルカロイドやアルコールの組み合わせ——そんなものだろう。問題は成分じゃない。効果だ。そいつは体験するしかないね」

神父はたてつづけに二つ三つ、クッキーを口にほうりこんだ。

「ジェリイがこっちに来るわ……」窓からのぞいていた妻がつぶやいた。「いつか来た、あの若い人も一緒……」

「言った通りだろう」スケッチブックを持って立ち上りながら、私は笑った。「また泊めてやらなければならんだろう。——お茶の用意をしないとやれ」

奥の仕事部屋に画板とスケッチブックを置いて、キッチンへひきかえすと、ジェリイと若い東洋人の客は、もう室内にはいって、ジャンパーをぬいでいた。二人の足もとに、まあらしい大型のスーツケースとポストンバッグがおかれ、ジェリイはごわごわした大きな紙袋を小脇にかかえていた。

「やあ……」と色の浅黒い、小柄な東洋人は私を見て笑いかけた。「また来ました」

「よろこそ……」と、私はぶっきらぼうに言った。「こんな島に、二度来られる方は珍しい」

「また泊めてもらえますか？」

「部屋は用意してありますよ」そう言つて私は奥の方へ顎^{あご}をしゃくつた。

「——ところで、絵具は買つて来てくれたかね？ ジェリイ」

ジェリイは睫毛^{まつげ}のほとんどない、さらされたような眼で私を見ると、いい方の手で、紙袋をさし出してテーブルにおいた。——テッドが先に紙袋に手をつっこみ、リカーの壘^{びん}と、紫色の防水紙にくるんだ小さな包みをひっぱり出した。ジェリイは、テッドの腕とあらそうように紙袋の中に手をつっこみ、水彩絵具の大きなチューブ五、六本と、一、三枚紙片をとり出し、油のしみたひっかき傷だらけの指につかんで私につき出した。私は絵具をちらと見て、紙片だけつまみとり、しわをのばして読んだ。一枚は画材の請求書であり、二枚は同じ町の土産物屋からの絵の注文だった。——一つは島のスケッチの、もう一つは町のホテルの娘の肖像画の注文だった。

「ケイトはいよいよ卒業か……」と私は火の消えたパイプをくわえながら言った。「結婚するのか？——いつ町へかえってくる」

ジェリイは肩をすくめて首をかしげた。

「まあいい。来週町へ行くから寄つてみよう。——絵具代もその時はらうって伝えてくれ。どうせ、前の絵の代金はもらつてこなかったんだらう？」

ジェリイはそれにこたえず、ポットから熱い茶をなみなとカップについて、ミルクも砂糖もいやというほど入れ、馬のように唇をそらせて、馬のように一氣にのみほした。

若い東洋人は、手持ち無沙汰のように、テーブルのわきにつたつたまま、例のあいまいな薄笑いをうかべていた。

「荷物を部屋にいれて、あなたもお茶をあがったらどうです？」私は声をかけた。「前の部屋です。おぼえているでしょう？」

青年は微笑したままうなずいて、ボストンバッグを持ち上げた。ジェリイが大きなトランクを持ち、二人は奥へはいって行った。

「中国人かね」

と、ルネ神父はドアのむこうへ消えた青年の方へ、顎をしゃくってきいた。

「いや——日本人だ」

と、テッドが水煙管の吸口を口からはなして、ゆっくりした口調で言った。

「ここへは二度目だ……」私はテッドの手から、吸口をうけとりながら言った。「二年前に来た時、あんたはたしか一ヵ月間も本土へ行っていて、彼とあわなかった」

「何をしてる男だ？——科学者かね？」

「いや……物書きだと言っていた」

「ジャーナリストか？ それとも小説家かね？」

「よく知らん。この前来た時も、時々、夜おそくまで、何か原稿のようなものを書いてた」

ジェリイのひよろりとした体が、奥のドアの所にのぞいたので、私と神父はこの話題をうちきった。
——ジェリイの背後に、青年の浅黒い顔が見えた。相変らず薄笑いをうかべている。

「今夜は島に泊まって行くのかね？」

と神父はジェリイにきいた。

ジェリイは首をふって、拇指オモムサで窓のむこうをさした。

「明日、出航が早いからね」

ジェリイは、かすれた声で言った。——それから、鳥の巢のようにくしゃくしゃの灰色の髪でおおわれた大きな頭を、ちょっとかしげるようにして、一同に会釈し、青年の方に手をあげて、外へ出て行った。

ジェリイと入れちがいに、船からうけとった食料品の籠をさげた妻がはいって来た。——風で乱れて、頬にたれかかる髪を、手の甲でおさえて、籠を流し台の上におくと、彼女は大きな溜息をついて、青年を見た。

「お昼食は？」と妻はつぶやくように青年にきいた。「シチューでよかったですね」

「いや、船ですませました……」と青年は言った。「ありがとう」

「つたつたないで、すわったら？」と私は水煙管をくばくば吸いながら言った。「ああ、こちらはじめてだったな。アントン・ルネ神父……中田さん……」

「ようこそ——」神父はたち上って、大きな手を出した。「観光客で、ここへ二度たずねてくるなんて、まったく珍しい。——よっぽど気に入りましたか？」

「別にそういうわけでもないんですけど……」中田青年は、また薄笑いをうかべた。「なんとなく来てしまったんです」

「今度はどのくらい滞在なさる？」

「そうですね。二週間か三週間ぐらい……こちらが御迷惑でなければ……」

「ここはかまいませんよ——料金さえきちんとはらってもらえば」と私は言った。「また何か書くんですか？」

「ええ、まあ……」

私はポットから茶を注いで彼の前においてやった。

「これが砂糖、これがジャムとマーマレード、ミルクはそれです。好きにやってください。——ラムカウイスキイを入れますか？」

「いえけっこうです。ありがとうございます」

中田青年の英語は、二年前よりずっとうまくなり、喋り方にも自信があらわれていた。それが、私の気をいささか重くさせた。——以前の滞在の時より、うるさいことになりそうな予感がしたからだ。

風がかわって、窓ガラスががたがた鳴った。——クワン師は、私からうけとった水煙管の吸口を唇からはなして、うつとりした眼つきで窓の外を見た。

「波がたつて来た……」とクワン師はつぶやいた。「今夜は荒れるぞ……」

「つめかえましょう、老師……」とテッドが手をのばした。

緩慢な手つきで新しい薬をつめかえるテッドを、中田青年は不思議そうな眼つきで見ていた。

「あんたもどうだね？」

新しく吸いつけると、テッドは吸口を掌でぬぐって青年にさし出した。

「何ですか？」青年の小鼻がうごめいた。何だか、少しおびえているようだった。「マリファナ？」

「もっといいものだ——」テッドは薄笑いをうかべた。「ハシッシュだ。——粗製だから大してつよ

くない。よかったら、阿片あへんもある。そちらにするかね？」

「まさか！」と青年は小さく叫んだ。「そんなもの——法に触れないんですか？」

「ここでは別に禁じられていない……」テッドは、吸口を隣の神父にまわしながらつぶやいた。「阿片あへんは、この群島の中でも一部で栽培されているが、あまり良質のものはとれない。——トルコやビルマ製のいい品物は値段も高いし、なかなか手にはいりにくい、さいわいさつきジェリイが持ってきてくれた。東南アジアで精製された虎牌こはい印だ。やってみるかね？」

「いえ……」青年は、少し腰をにじらせるようにしてはげしく首をふった。「ぼくは……けっこうです」

「そうか——むりには勧めない。大したものじゃないから……」

「あなたたち——中毒しているんですか？」

神父が大声で笑い出した。

「どうか——生阿片なら一回二、三グラムを四人で吸うだけだ。それも別に毎日ってわけじゃない」

「禁断症状はおこりませんか？」

「私は煙草や酒をのまない方がつらいね」と私は口をはさんだ。「そんなに気にしなくてもいい。ここでは、こういったものは、社会問題じゃなくて、個人の問題なんだ」

「どういう意味ですか？」青年は眉をひそめた。「よくわかりませんが……」

「そりゃ、ここが島だからさ……」とテッドが言った。「離れ小島で……住民は四家族しかいないからな」

「ランチがかえって行く……」窓の外を見ながらクワン師がつぶやいた。「明日も、海は荒れるかな……」

「曇って来ましたな」と神父がゆっくりと煙を吐き出しながら言った。「寒くなるかも知れん……」

2

ところどころヒースの茂みにおおわれたゆるい斜面を、島の奥へむかつてのぼりつめて行くと、はるか空の上で、かすかに蜂のうなるような音がした。

見上げると、銀灰色の雲の団塊がいくつもうかんだ空の上をきらりと光りながら横切って行くものがあった。——週に一度、群島の上空を横切るローカル線のターボプロップ機だった。私は本土の方へ消えて行く機影を見上げながら、露出した大きな砂岩の陰でパイプを吸いつけた。島の西側から丘陵をこえて時たま吹きおろしてくる風が、煙を吹きちらした。

斜面の中腹の岩にもたれて、私は島を見わたした。——別にかわったものが見えるわけでもない。その岩の所で一服するのはいつもの習慣だった。

島はいつもの通り、天と水との間に無言で横たわっていた。——木一本はえていない、荒涼たる枯草色の斜面が、私の立っている地点から東へむかって、左右両翼に長くのびて、ほとんど完全な円弧にちかい、深い湾をかかえこんでいる。海へむかってなだらかにのびる二つの斜面の先は、南の方が断崖になっておちこみ、北の方はそのままゆるい傾斜となって海中に消えている。南の岬の沖には、海蝕によって下部が逆三角形にはそめられた巨岩が海中に二つ三つつたち、湾の沖合には、陵墓の